

三つの古代枚方・・・王仁・継体・百済王

今年2007年は、継体天皇が枚方の樟葉宮で即位されて1500年という記念すべき年に当たります。それで、少し継体天皇のこともお話させて頂きたいと思いました。継体天皇も結構百済と関係が深いですし、そうするともう一つ百済と関係のある王仁博士も加えて3題断にしようと思いつきまして、お手許の資料のような演題になりました。

私たちの「百済の会」は、中宮にある「国指定特別史跡百済寺跡」を顕彰するためにこのような催しを行っておりまして、4世紀から7世紀に掛けて朝鮮半島にあった百済という国に、もっと親しんで頂きたいなと思っております。この岡東中央公園で開催するのは初めて、従って始めてお越し頂いた方も多いようですので、枚方に馴染みの樟葉宮や王仁塚も取り上げてよかったなと思っております。

1. 王仁

(1) 王仁の渡来

① 百済の近肖古王

半島に三国時代と呼ばれている時代がありました。北の高句麗、南西部の百済、南東部の新羅が鼎立し、互いに勢力を争った4世紀から7世紀に掛けての時代です。紀元1世紀頃に出来たと言われる百済ですが、国家としての体制がやっと整ったのは、近肖古王が都を漢城に定めて王位を確立した346年頃からでした。

この王のときに、倭王は使者シマノスクネを伽耶卓淳国経由で百済に遣わしています。これがわが国と百済の関係の始まりです。近肖古王は346年から375年の間王位にありましたが、その晩年の頃に応神天皇の要請を受けた阿直岐という学者の進言によって、王仁を倭国に遣わします。その王仁は論語10巻と千字文とを携えてやってきまして、わが国に儒教と漢字を齎しました。王仁は、半島で中国が支配していた楽浪郡が滅んだときに、百済に亡命してきた王氏の末裔ではないかと言われております。

② 菟道稚郎子

さて、応神天皇は何故王仁の派遣を要請したのでしょうか。資料を見て頂きますと、応神天皇に3人の皇子がおられます。それぞれ母親が異なりますが、応神天皇は一番年下の子である菟道稚郎子を寵愛してこれを皇太子にします。オオサザキ即ち後の仁徳天皇ですが、彼はこれに賛成するのですが、大山守は反対しそのために殺害されてしまいます。応神天皇が亡くなって皇太子菟道稚郎子が即位する筈でしたが、菟道は兄のオオサザキが後を継ぐべきだと言って自殺してしまいます。

そしてオオサザキが立ち仁徳天皇となります。美談のようではありますが、ちょっと話の辻褄が合わないのか、菟道稚郎子が一端は皇位に着いたけれども、オオサザキによって殺害されたのではないとか、いろいろと推測されています。仁徳は天皇になった当初は、庶民の竈の煙が立たないのを見て税を免除したとか善政で知られますが、後になると皇后の磐之媛が家出をして帰ってこないような奔放な行状をしていて、どうも同一人物とは思えない、だから仁徳の初めの頃の事績は実は菟道稚郎子菟道稚郎子のものであって、後の方が仁徳そのものであるというのです。ちょっと菟道彥肩のお話しであるような気もします。菟道稚郎子のお墓は京阪宇治駅の側にありますね。

応神天皇が菟道稚郎子を皇太子に立てて、その帝王教育のために招いたのが王仁と考えられます。論語や千字文はその教科書として持ってきたのでしょうか。菟道稚郎子の母は和邇氏の出ですから渡来系の人です。阿直岐の進言によって肖古王が王仁を派遣したのでしたが、阿直岐に話を通じたの

はこの和邇氏だったのではないのでしょうか。

余談ですが、古今和歌集にある「なにはづに さくやこのはな ふゆごもり いまははるべと さくやこのはな」という有名な歌は、この王仁の作であると言われています。

(2) 王仁塚

① 王仁塚の真偽

王仁は、古代において学問を司った文(あや)氏の祖であると言われています。文氏は藤井寺や堺の方が根拠地ですから、宇治と藤井寺を結ぶ道筋の藤坂にそのお墓があってもおかしくはないのですが、その成り立ちの過程を考えますとちょっと疑問が残ります。

1616年といいますから江戸時代の初期の頃ですが、禁野和田寺の道俊が「王仁墳来朝記」という本を著しまして、藤坂にある「鬼墓」と言われている自然石は王仁墓であると唱えました。1731年將軍徳川吉宗の頃に、京都の儒教学者並河誠所が「五畿内志」という名所案内のような本を出しまして、この道俊説を追認致しました。そして領主久貝因幡守正順に墓碑建設を進言し「博士王仁之墓」の碑が建てられました。1937年になって菅原村の村長が大阪府に史跡指定を申請し、翌1938年即ち昭和13年に大阪府が「伝王仁塚」として史跡13号に指定することになります。大東亜共栄圏を掲げて戦争に突き進んで行く当時の空気が反映されたものだったでしょう。

② 韓国での顕彰

王仁博士の存在は韓国では全く知られていませんでした。あちらの文献には全く見当たらないのです。ましてや王仁塚の存在など論外でした。ところが金昌沫という人が1970年の大阪万博を機会に、王仁のことを研究しようと情報収集に乗り出しました。そして1973年に霊岩郡青年会議所会頭からの情報に基づいて、王仁出生地は全羅南道・霊岩郡の郡西面東鳩林里山であるとい説を唱え、「社団法人王仁博士顕彰協会」を設立しました。そして3年後の1976年にはその場所が、王仁遺跡地として全羅南道教育委員会によって全羅南道文化財記念物20号に指定され、「王仁博士遺墟碑」が建立されました。あれよれよという間の顕彰です。

韓国の中学校国定歴史書には王仁塚の写真が掲載され、「王仁は日本に進んだ文化を伝えた」と記載されています。韓国が日本に対する文化的優位性を示す事例として利用されているような気がします。その影響があって、王仁塚は韓国からの資金で立派に整備されました。韓国からの観光客が大勢訪れているようです。しかし私たち日本人も、王仁塚の真偽は別にしまして、古代において文化は半島から特に百済からやって来たということをもっと素直に認める必要があると思います。

2. 継体天皇

(1) 継体天皇の登場

① 樟葉宮

継体天皇が枚方の樟葉宮で即位されたのは507年のことでした。ですから今年2000年は、丁度1500年の記念すべき年に当たります。樟葉宮とはどこかと言いますと、樟葉丘2丁目に小高い山がありますが、そこに交野天神社があってその石段の脇に「此附近継体天皇樟葉宮跡」という碑が立っています。ここがそうであろうと言われています。

さて、先程お話ししました応神天皇或いは仁徳天皇から始まったといわれる河内王朝は、武列天皇をもって断絶してしまいました。皇室内での激しい権力争いによって多くの男子が殺されてきたことが、その第一の理由に挙げられますが、いずれにしても武列天皇には子がいなかった。日本書紀には極悪非道の暴君として描かれていますが、皇統の途絶えるときにはそのときの為政者は

悪者として描かれるのが中国風のやり方です。

当時の有力者である大伴、物部、蘇我などが相談して、最後に白羽の矢を立てたのが今の福井県であります越前にいた男大迹王（おおどのおう）です。応神天皇5世の孫と言われて系図はちゃんと書かれています。真偽の程は分かりません。日本書紀が書かれた頃、皇族として認められるのは5世までに限ると定められ、それを当てはめたと考えられるからです。しかも大体5世ともなれば何処の誰かもよく分からないというのが普通でしょう。しかし越前では非常に人望の高い王様で、治水などにも功績が大きかったようであります。大連大伴金村が現地へ出向いて招請しますが、男大迹王にはその時既に大王の気品が備わっていたと書かれています。しかし思慮深い男大迹王はなかなか承知しません。中央政権に何の関係もない自分が引き出されることを警戒するのは当然のことです。事実、継体の前に声を掛けられた亀岡にいた大和王というのは、都から使者が来たというだけで身の危険を感じて逃げ出しています。

② 河内馬飼首荒籠

そこで仲を取り持ったのが河内馬飼首荒籠（かわちうまかいのおびとあらこ）でした。荒籠は名前からして推測されるように、河内の馬飼いのドン、首領です。馬飼いは運搬業者であり、戦時には戦闘要員としても活躍します。河内馬飼いの根拠地は四条畷の辺りだったと言われていたのですが、発掘調査が進んでくるにつれて、交野辺り、即ち枚方ですね。ここらも馬飼いが盛んだったと見られるようになってきました。枚方の古墳からも馬具が出土しています。荒籠は交野の馬飼いだったのではないのでしょうか。

荒籠は、日本海を越えて半島と交易していた男大迹王とは、運搬業を通して旧知の仲だったのではないのでしょうか。荒籠という名前は半島にあった伽耶地域の一国である安羅の人という意味でしょう。唐の人を唐子と言いますね。その踊りを唐子踊りと言っています。あれと同じだと思います。男大迹王の交易は多分伽耶地域が最も大きかったということは、地域的に見て容易に想像出来ます。荒籠はそんなことから男大迹王とは大変親しかったのでしょうか。男大迹王が荒籠を信用して、天皇になることを引き受けた、もっともその頃は天皇とは言っておきませんで、大王というのが正しいのですが、荒籠に説得されて男大迹王は大王になることを承知しました。

しかし、越の国から大和に入るにはやはり大変な勇気が必要です。男大迹王はそれまでに近江や尾張の方に勢力を伸ばしておきまして、尾張からは目子媛を娶っています。しかし大和にはどんな落とし穴があるか分かりませんし、豪族の全てが味方であるとも考えられません。だから、すぐに大和に入るのではなくて荒籠の根拠地である河内の樟葉で即位したのは賢明なことでした。樟葉は昔から交通の要衝でありまして、大和から出て来ますと、樟葉の渡しを渡って北陸道、丹波道、西海道へと通じて行きます。大和を伺いながら退路も確保し、しかも協力者がいるという交野の樟葉は、継体にとってこれ以上ない場所だったに違いありません。今の感覚では分かりませんが、樟葉というところが古代では如何に重要な土地であったかを知っておく必要があると思います。

③ 乙訓宮と国際情勢

507年に樟葉宮で即位した継体天皇は、前の武烈天皇の妹の手白香媛を娶って皇統を継承する体裁を整えます。当然大和の豪族たちの希望だったに違いありません。即位して4年目の511年に筒城宮に都を移します。葛葉から山一つ越えた今の精華町の辺りで、一步大和に近づいた感じですが、地形的に見てやはり一つの大要衝だったのでしょうか。7年後の518年には今度は乙訓宮に移ります。これは今の長岡京市です。ここに移った事情は推察することが出来るように思います。この遷都は大和からはまた遠ざかったことになりませんが、当時の半島情勢と九州の情勢を考えると合点がいきます。半島では新羅が盛んに伽耶に進出して百済も脅かされ、それに伴って倭国は大伴金村が、512年に任那4県を百済に割譲、続く513年には任那2郡を同じく百済に割譲というよ

うに、半島での権益が侵される事態が起こります。新羅と百済がまさに一触即発の状態、わが国も巻き込まれずにはいられないでしょう。九州筑紫の磐井が新羅と結んで大和に対抗する勢いです。これらに対応するための交通の便を考えてみると、淀川から瀬戸内海を通過して北九州に通じる湊としての拠点であり、継体の元の根拠地である越を背景にもつ要衝であり、大和勢力の離反の危険へも対応出来ることを考えれば、戦略上大変すばらしい場所だと言えるのです。私はそのように考えております。

継体はその後526年にやっと大和の磐余玉穗宮に入ります。天皇になって20年近く経っています。恐らく筑紫の磐井に対して大和豪族の結束がやっと固まり、半島への進出態勢が整ったのではないのでしょうか。これらの手立ては乙訓宮時代に完了していたに相違ありません。継体が大和に入った翌年の527年には、近江臣毛野が大軍を率いて半島に向かって出発しますし、それを阻止しようとした筑紫の磐井に対しては物部麁鹿火が出向いて行って528年にこれを征伐するという早業を行っています。大和に入ってから対策を考えていたのではとてもこのようには行かなかったでしょう。ここにも継体天皇の英知と実行力を伺い知ることが出来ると思います。

④ 「ひらかた」の初出

527年に継体によって半島に進軍しようとした近江臣毛野は、529年になってやっと任那に入ります。これは多分伽耶の安羅国でしょうが、ここで毛野はかなり強引な交渉をしたようで各国の不興を買い、問題を解決をすることが出来ずに帰国することになります。毛野はその帰国途上で対馬において亡くなりますが、その亡骸を引き受けるために枚方までやってきた毛野の奥さんが次のような歌を詠みます。

ひらかたゆ 笛吹きのみる 近江のや 毛野の稚子い 笛吹きのみる

この歌は日本書紀に載っているのですが、枚方ということばが文献上初めて見られるのが、この歌であります。この意味においても継体天皇と枚方は縁があると言えるかも知れません。もちろん「ひらかた」は難しい万葉仮名で当てられています。「枚方」という字が当てられたのは何時なのかははっきりしないようですが、播磨国風土記には「平方」という字が当てられています。

3. 百済王

(1) 百済国

① 三国時代

さて、いよいよ百済王であります。その前に百済という国そのものについて少しお話しさせていただきます。朝鮮半島に4世紀から7世紀に掛けて三国時代と言われる時代があったことは前にも申しましたが、その三国の一つが百済です。高句麗という国が今の北朝鮮のほうにあり、南のほうの東側が新羅、西のほうが百済という風に考えて頂ければよろしいかと思います。実はもう一つ、伽耶と言われる地域が新羅と百済の間にあります。伽耶も先に触れましたが、ここは三国のように中央集権的な国家形態を持たなかったところで、部族国家の連合体のまま残った地域でした。ここにわが国も進出しています、いわゆる任那とか任那日本府だとか言われている権益を確保します。領土化したかどうかわかりませんが、新羅や百済との関係を見ますと、かなり強い勢力を持っていたと言ってよいと思います。そして、三国と倭国が四つ巴になって争ったのがこの三国時代です。なお韓国では、倭国の介入を無視しています、当然任那日本府の存在も認めていません。

その百済と倭国とは、任那における利害関係に共通するところがあったものですから、殆ど同盟関係にあったわけで、従って半島からの文化の流れも主として百済からやって来たと言えるでしょう。継体天皇の頃には五経博士が来て中国の儒教や道教を伝えていますし、欽明天皇の時には仏教が公伝されています。公伝といえますのは、朝廷を通して公式に伝えられたという意味です。民間

での交流も盛んでしたから、もっと早くから仏教が伝えられていた可能性はあると思います。

② 百済の滅亡

その百済が、660年に新羅と中国の唐との連合軍によって滅ぼされます。その時の百済の王は義慈王というのですが、一時新羅に対してかなり優勢だった時即ち642年頃に、背後を固めるため倭国との親交を深めますが、その人質として王子の豊璋と禅広をわが国に送ります。その王子豊璋を担いで百済復興運動が起こるのですが、時の斉明天皇と中大兄皇子がその後押しをしまして大軍を半島に送ります。天皇自ら九州まで出向いて行くという力の入れようでした。

しかし、百済の内部での対立が生まれ、復興運動の中心的人物であった鬼室福信が豊璋に殺害されたりして戦意を喪失し、また白村江の戦いで倭国の艦船が唐により壊滅的な打撃を受けて敗走したために、復興運動は失敗に終わってしまいました。こうして百済は完全に消滅してしまいます。663年のことです。

この後668年には新羅は高句麗をも滅ぼし、唐をも追い出して半島を統一してしまいます。三国時代はこうして終焉します。

(2) 百済王敬福

① 渤海国

王子豊璋と共に日本に来ていた禅広は、中大兄皇子によって難波に土地を与えられ、そこに百済からの亡命者たちと共に百済人の町を作ります。ミニ百済といってもよいかも知れません。今のJR環状線寺田町から桃谷辺りの一帯です。そしてその後禅広は、持統天皇から百済王(くだらのこにきし)の姓を受けます。ですから、百済王というのは百済の王様ということではなくて、日本の姓としての「百済王」であるということです。ひょっとすると、持統天皇がこのミニ百済の街を見て、禅広をここの王様にしてやろうと、茶目っ気を出して考えられたのかも知れません。

さて、その禅広の子や孫も奈良朝ではかなりの地位を得ていたようですが、曾孫に敬福という人がいます。738年に陸奥介になって東北の方に行きますが、その前の727年に高句麗の残党が、満州のほうに建設した渤海という国が使者を送ってきます。そして、出羽国の能代に船が漂着します。24人が来たのですが、蝦夷に捕まって16人が惨殺されて8人だけがかろうじて奈良の都に到着することが出来て、聖武天皇に謁見するわけです。その使節が国書を携えてきておりまして、倭と渤海とは兄弟の関係にあるのだから同盟しようというようなことが書かれている。彼らは倭も北方民族のツングース族で、同じ人種と考えているのですね。因みに百済の王家は高句麗の王の一族から出ていますから、むしろ百済ははっきりと高句麗と兄弟である関係にあります。いずれにしても、国交を結んで貿易をすることは倭国にとっても大きな利益でありますし、半島を統一した新羅への対応という点から見ても異議がありませんから、聖武天皇は渤海使節を大切に扱ひまして、今後も蝦夷の妨害があるかも知れない陸奥や出羽の地を固めようとしています。

第2回目の使節が739年にやってきますが、敬福が陸奥介に着任した翌年ということになります。使節渡来の情報をキャッチして敬福を陸奥に派遣したのではないのでしょうか。使節が蝦夷による妨害に会わないよう無事に奈良の都まで来ることが出来るように警護を委ねられたということであるような気がします。

② 金900両献上

さて、738年に陸奥介になった敬福は742年には陸奥守に栄進します。この年は聖武天皇が大仏建立を発願された年に当たります。敬福は河内守となったのちにも、出雲守、南海節度使などと渤海対策らしい役職を歴任しています。南海節度使とは、連合艦隊司令長官のような役割です。出雲守もそうだと思いますが、日本海の海上警備をやったのですね。渤海使節は平安時代までに亘

って37度ほど日本に来ていますが、潮の加減で出羽国だけでなく、裏日本のあちこちに来てきているのです。

敬福が陸奥守であった749年は大仏の鑄造工事が終わりに近づいておりましたが、さて仕上げに金メッキを施すための金が足りないことが分って、聖武天皇は心配しノイローゼ気味でした。そこへ陸奥守の百済王敬福から金900両を献上する使者がやって来たのです。陸奥守の根拠地は仙台の近くの多賀城ですが、そこから北のほう10キロくらいに涌谷というところがありまして、そこから砂金が採れたのです。涌谷は今金の町として宣伝されていますが、百済王には武力が備わっていた上に、亡命者の中にはいろいろな技術者がいたわけですから、砂金採取の技術も敬福の赴任によって伝えられたのでしょう。金900両と申しますと大体13.5キロくらいだそうです。大仏全体の必要量からしますと4分の1くらいの量だったと言いますから、大したことはないと言ってしまえばそれまでですが、聖武天皇は取り敢えず金の目途が着いたものですから大層喜ばれて、敬福を7階級特進の従三位とし、宮内卿河内守に任じられました。

その河内守敬福に与えられた土地が枚方の、というより交野の中宮であります。まさに百済王神社があり、百済寺跡のあるあの辺りから北に広がる一帯であります。そこに役所街や住居街が形成され、氏寺としての百済寺が建設されました。発掘された瓦などから、建設されたのは敬福の時代よりも少し下がるという説が有力なようであります。昨年からの発掘調査で百済寺のすばらしさが確認されてまいりました。ここには百済王がやってくる前に既にかなり大規模な街が出来ていたようで、百済王は原野を与えられたのではなくて、そうした街を与えられてその基盤の上に自らの都を建設し氏寺を建てたということになります。敬福は766年に死去しております。

(3) 百済王明信

① 明信の活躍

敬福の孫娘に明信という人がいます。才色兼備のすばらしい女性だったようで、藤原南家の継縄(つぐただ)の妻となりますが、交野に狩猟のため行幸した桓武天皇に見初められて尚侍(ないしのかみ)となります。今で言えば宮内庁長官です。いつも天皇の側にあつて身の回りを世話する、そんな役所の長官に抜擢されたわけであります。従二位にまで昇進させたり、二人の間にあつた宮中の出来事の記録から見ても、桓武帝が明信を愛していたであろうことは容易に想像できるのです。

桓武天皇の母は、高野新笠と言いまして、百済25代武寧王の子孫に当たる倭乙繼の娘であります。即ち、桓武帝には半分百済の血が入っているのです。そんなことから、桓武天皇は百済王を特別扱いにされたのかも知れません。790年には「百済王等は朕が外戚なり」と詔を下されています。また、明信のほかにも多くの女性が桓武帝の後宮に入っています。

全体に十分なお話しをすることが出来ませんでした。どうぞ後ほど資料をご覧になってご確認して頂ければ幸いです。なお、その資料の末尾のほうに記載させて頂いております七夕のことですが、7月には全国七夕サミットが枚方で行われることでもありますので、少しお話しさせて頂いて終わりにしたいと思います。

(*七夕についての話しは、この記録からは省略しました。)